

# 女人訓戒

太宰治

青空文庫



辰野<sup>ゆたか</sup>隆<sup>たか</sup>先生の「仏蘭<sup>フランス</sup>西文学の話」という本の中に次のような興味深い文章がある。

「千八百八十四年と云うのであるから、そんな古い事ではない。オオヴェルニユのクレエルモン・フェラン市にシブレエ博士と呼ぶ眼科の名医が居た。彼は独創的な研究によつて人間の眼は獸類の眼と入れ替える事が容易で、且つ獸類の中でも豚の眼と兔<sup>うさぎ</sup>の眼が最も人間の眼に近似している事を実験的に証明した。彼は或る盲目の女に此<sup>こ</sup>の破天荒の手術を試みたのである。接眼の材料は豚の目では語呂が悪いから兎の目と云う事にした。奇蹟<sup>きせき</sup>が実現せられて、其の女は其の日から世界を杖で探る必要が無くなった。エ

デイポス王の見捨てた光りの世を、彼女は兎の目で恢復かいふくする事が出来たのである。此の事件は余程世間を騒がせたと見えて、当時の新聞にも出たそうである。然しかしながら数日の後に其の接眼の縫目が化膿かのうしたために——恐らく手術の時に消毒が不完全だったのだろうと云う説が多数を占めている——彼女は再び盲目になつて了しまつたそうである。当時親しく彼女を知っていた者が後に人に語つて次のような事を云つた。

——自分は二つの奇蹟を目撃した。第一は云う迄もなく伝説中の奇蹟と同じ意味に於ける奇蹟が、信仰に依よらずして科学的実験に依つて行われたと云う事である。然し之れは左迄さまでに驚く可べき現象ではない。第二の奇蹟のほうが自分には更に珍であつた。それ

は彼女に兎の目が宿っていた数日の間、彼女は獵夫を見ると必ず逃げ出したと云う現象である。」

以上が先生の文章なのであるが、こうして書き写してみると、なんだか、ところどころ先生のたくみな神ミステフィカション秘捏造も加味されて在るような気がせぬでもない。豚の眼が、最も人間の眼に近似しているなどは、どうも、あまり痛快すぎる。けれども、とにかくこれは真面目な記事の形である。一応、そのままに信頼しなければ、先生に対して失礼である。私は全部を、そのままに信じることにしよう。この不思議な報告の中で、殊に重要な点は、その最後のいちぎょう一行に在る。彼女が獵夫を見ると必ず逃げ出した、という事実じじつに就いて私は、いま考えてみたい。彼女の接眼の材料は、

兎の目である。おそらくは病院にて飼養して在った家兎にちがいない。家兎は、獵夫を恐怖する筈はない。獵夫を、見たことさえないだろう。山中に住む野兎ならば、あるいは獵夫の油断ならざる所以のものを<sup>ゆえん</sup>知っていて、之を敬遠するの<sup>また</sup>も亦当然と考えられるのであるが、まさか博士は、わざわざ山中深くわけいり、野生の兎を汗だくで捕獲し、以て実験に供したわけでは無いと思う。病院にて飼養されて在った家兎にちがいない。未だかつて獵夫を見たことも無い、その兎の目が、なぜ急に、獵夫を識別し、之を恐怖するようになったか。ここに<sup>さしう</sup>些少の問題が在る。

なに、答案は簡単である。獵夫を恐怖したのは、兎の目では無くして、その兎の目を保有していた彼女である。兎の目は何も知

らない。けれども、兎の目を保有していた彼女は、獵夫の職業の性質を知っていた。兎の目を宿さぬ以前から、獵夫の残ざんぎやく虐やくな性質に就いては聞いて知っていたのである。おそらくは、彼女の家の近所に、たくみな獵夫が住んでいてその獵夫は殊にも野兎捕獲の名人で、きようは十匹、きのうは十五匹、山からとつて帰つたという話を、その獵夫自身からか或いは、その獵夫の細君からか聞いていたのでは無かろうかと思われる。すると、解決は、容易である。彼女は、家兎の目を宿して、この光る世界を見ることができ、それ自身の兎の目をこよなく大事にしたい心から、かねて聞き及ぶ獵夫という兎の敵を、憎しみ恐れ、ついには之をあらわに回避するほどになったのである。つまり、兎の目が彼女を兎

にしたのでは無くして、彼女が、兎の目を愛するあまり、みずからすすんで、彼女の方から兎になってやったのである。女性には、このような肉體倒錯とうさくが非常にしばしば見受けられるようである。動物との肉體交流を平気で肯定しているのである。或る英学塾の女生徒が、Lという発音を正確に発音したいばかりに、タングシチユウを一週二回ずつの割合いで食べているという話も亦、この例である。西洋人がLという発音を、あんなに正確に、しかも容易にこなしているのは、大昔からの肉食のゆえである。牛の肉を食べるので、牛の細胞がいつしか人間に移殖され、牛のそれの如く舌がいくぶん長くなっているのである。それゆえ彼女もLの発音を正確に為す目的を以て、いま一週二回の割合いでタングシチ

ユウを、もりもり食べているというのである。タングシチュウは、ご存じの如く、牛の舌のシチュウである。牛の脚の肉などよりは、直接、舌のほうに効目ききめがあろうという心意気らしい。驚くべきこととは、このごろ、めきめき彼女の舌は長くなり、Lの発音も西洋人のそれとほとんど変らなくなつたという現象である。これは、私も又聞で直接に、その勇敢な女生徒にお目にかかつたことは無いのだから、いま諸君に報告するに当つて、多少のはにかみを覚えるのであるが、けれども、私は之をあり得ることだと思つているのである。女性の細胞の同化力には、実に驚くべきものがあるからである。狐きつねの襟えりまき巻まきをすると、急に嘘つきになるマダムがいた。ふだんは、実に謙遜なつつましい奥さんであるのだが、一旦、

狐の襟巻を用い、外出すると、たちまち狡猾こうかつきわまる嘘つきに変化している。狐は、私が動物園で、つくづく観察したところに依つても、決して狡猾な悪性のもものでは無かつた。むしろ、内気な、つましい動物である。狐が化けるなどは、狐にとって、とんでも無い冤罪えんざいであろうと思う。もし化け得るものならば何もあんな、せま苦しい檻おりの中で、みつともなくうろろして暮している必要はない。とかげにでも化けてするりと檻から脱け出られる筈はずだ。それができないところを見ると、狐は化ける動物では無いのだ。買いかぶりも甚はなはだしい。そのマダムもまた、狐は人をだますものだと単純に盲信しているらしく、誰もたのみもせぬのに、襟巻を用いる度毎に、わざわざ嘘つきになって見せてくれる。御

苦勞なことである。狐がマダムを嘘つきにしているのでは無く、マダムのほうから、そのマダムの空想の狐にすすんで同化して見せているのである。この場合も、さきの盲目の女の話と酷似しているものがあると思う。その兎の目は、ちつとも獵夫を恐怖して、いないばかりか、どだい獵夫というものを見たことさえもないのに、それを保有した女のほうで、わざわざ獵夫を恐怖する。狐が人をだますものでもないのに、その毛皮を保有したマダムが、わざわざ人をだます。その心理状態は、両女ほとんど同一である。前者は、實在の兎以上に、兎と化し、後者も亦、實在の狐以上に、狐に化して、そうして平気である。奇怪というべきである。女性の皮膚感觸の過敏が、はんらん氾濫して收拾できぬ觸覚が、このような二、

三の事実からでも、はつきりと例証できるのである。或る映画女優は、色を白くする為に、烏賊いかのさしみを、せつせとたべているそうである。あくまで之を撰せつしゆ取すれば、烏賊の細胞が彼女の肉体の細胞と同化し、柔軟、透明の白色の肌を確保するに到るであろうという、愚かな迷信である。けれども、不愉快なことには、彼女は、その試みに成功したという風聞がある。もう、ここに到つては、なにがなんだかわからない。女性を、あわれと思うより致しかたがない。

なんにでもなれるのである。北方の燈台守の細君が、燈台に打ち当つて死ぬかもめ鷗の羽毛でもつて、小さい白いチョツキを作り、貞て淑いしゆくな可愛い細君であつたのに、そのチョツキを着物の下に着

込んでから、急に落ち着きを失い、その性格に卑しい浮遊性を帯び、夫の同僚といまわしい関係を結び、ついには冬の一夜、燈台の頂上から、鳥の翼の如く両腕をひろげて岩を噛む怒濤めがけて身を躍らせたという外国の物語があるけれども、この細君も、みずからすすんで、かなしい鳴の化身となつてしまつたのであろう。なんとも、悲惨のことである。日本でも、むかしから、猫が老婆に化けて、お家騒動を起す例が、二、三にとどまらず語り伝えられてゐる。けれども、あれも亦、考えてみると、猫が老婆に化けたのでは無く老婆が狂つて猫に化けてしまつたのにちがいない。無慙むざんの姿である。耳にちよつと触れると、ぴくつとその老婆の耳が、動くそうではないか。油揚を好み、鼠を食すというのもあな

がち、誇張では無いかも知れない。女性の細胞は、全く容易に、動物のそれに化することが、できるものなのである。話が、だんだん陰鬱になって、いやであるが、私はこのごろ人魚というものの、實在性に就いて深く考えているのである。人魚は、古来かならず女性である。男の人魚というものは、未だその出現のことを聞かない。かならず、女性に限るようである。ここに解決のヒントがある。私は、こうでは無いかと思う。一夜彼女が非常に巨大の無気味の魚を、たしなみを忘れて食い尽し、あとでなんだかその魚の姿が心に残る。女性の心に深く残るといふことは、すなわちそろそろ、肉体の細胞の変化がはじまっている証拠なのである。たちまち加速度を以て、胸焼きこげるほどに海辺を恋い、足袋たびは

だしで家を飛び出しぎぶぎぶ海中へ突入する。脚にぶつぶつ鱗うろこが生じて、からだをくねらせ二搔かき、三搔き、かなしや、その身は奇しき人魚。そんな順序では無かろうかと思う。女は天性、その肉体の脂肪に依り、よく浮いて、水泳にたくみの物であるという。

教訓。「女性は、たしなみを忘れてはならぬ。」



# 青空文庫情報

底本：「太宰治全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年10月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月刊行

入力：柴田卓治

校正：小林繁雄

1999年11月22日公開

2005年10月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 女人訓戒

太宰治

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>